舟場と田中橋

舟場という地名や町村名は全国に多くあるが、大館の舟場と田中橋について次のような話が語り継がれている。

舟場は、鉄道が敷かれ道路が完備されるまで、文字通り大館町への物資の輸送に大きな役割りを持ち、米代川を往来する船や船客の宿場町でもあった。現在田畑になっている土地まで広くはたご(旅館)や茶店が建ち並び、近くの小館花には商家の倉庫がつづき、近くには輸送のための人夫が住む家があった。この人たちは、明治の世になり船による輸送が少なくなると、農業に職をかえて住居を根下戸や小館花に移したといわれている。

舟場から米代川対岸の真中、二井田村へ連絡するために橋が架けられ、この橋を田中橋と呼んでいる。それは、ここに橋を架けて交通を便利にしようとして努力した、舟場の肝煎田中藤次の姓をとったものであるという。

田中藤次は川向うの真中、二井田村との交通を便利にしようと渡船から橋の建設を志した。藤次よりも以前、かなりむかしから橋を架ける試みがなされてはいたが、川幅が広く水量が多いため、幾度となく失敗して完成をみることができなかったという苦心談が残されている。藤次はムラ人を説得し工事に着手したが、工事半ばで流失を繰返し、ついにムラ人の協力も得られなくなり、人々の笑いものになってしまった。しかし、藤次の志は強く工事はつづけられた。工事費はかさみ藤次は土地を売り払ってまで費用をつくり工事をつづけたが、橋の完成を見ずに藤次の資産は人手に渡り、とうとう自分の住むところも失い、ムラを夜逃げするという破目になってしまった。それを知ったムラ人たちは、ついに藤次の熱意にめざめて気の毒に思い、住宅だけは藤次がいつムラへ帰ってきてもいいように残しておいたという。